

学 位 論 文 題 名

Possessive Expressions in Alutor

(アリュートル語の所有表現)

学位論文内容の要旨

1) 本論文の観点と方法

本論文は、カムチャツカの少数民族言語アリュートル語について、所有にかかわるさまざまな表現を分析し、記述したものである。アリュートル語は長いあいだ、同系のコリヤーク語の方言と位置付けられ、独自の研究が立ち遅れてきたうえに、今日では数百人の話者を残すのみの「消滅の危機に瀕した言語」である。申請者は本学文学部卒業後、いち早くカムチャツカに渡り、現地で4年間日本語教師を務める中でこの言語に出会い、以来10年近くにおよぶ現地調査を重ねてきた。その成果の一部はすでに文学研究科平成13年度修士論文「アリュートル語文法概説」としてロシア語でまとめられた(その後改訂を加えて、平成15年度特定領域科研報告書の一冊として刊行)。今回の博士論文ではこれを踏まえ、自身の調査で得られた資料を中心に、所有にかかわる表現をほぼ網羅的に取り上げ、記述するとともに、その文法的機能や意味的差異を論じている。諸形式の記述にあたっては、基本的にディクソン(Dixon 1976)がオーストラリア原住民諸語の所有形式の記述で用いた方式になっている。すなわち、各章のはじめでそれぞれの形式の音韻的および形態的な変異形を記述し、次に形態および統語の面からみた機能を述べ、章末で「所有者」と「所有物」のあいだの意味的な関係について論じる、という明確なスタイルで一貫している。

本論文は、現地調査で得た一次資料を記述言語学のオーソドックスな手法によって分析・記述するのみならず、同系のコリヤーク語・チュクチ語を含めた先行研究を批判的に踏まえ、チュクチ・カムチャツカ語族の記述研究と比較研究に寄与するものである。また所有表現をめぐる理論的・類型論的研究をも視野に入れ、一般言語学や言語類型論に対しても、あらたなデータを提供するものである。

2) 本論文の構成と内容

本論文は英文A4判173ページ(34行詰、約31,000語)からなり、「序文」を含む8つの章と、「付録」から構成されている。

序文にあたる第1章においては、問題の所在と、先行研究の状況が述べられ、本論文の構成が示される。アリュートル語および同系諸言語の所有表現については、従来いくつかの論文や、文法記述の一部として取り上げられてきたものの、いずれも所有表現全体を詳細に記述するものではなかった。アリュートル語と同系のチュクチ語やコリヤーク語についても同様に、所有表現については各言語につきそれぞれせいぜい1本の論文があるのみ

である。こうした理由から、本論文ではアリュートル語の所有表現について包括的かつ詳細な記述を目的とすることが述べられている。この研究はまた、所有表現をめぐる通言語的・類型論的研究をも視野におさめるとともに、これに新たなデータを提供することで寄与をはかるものであることが示される。

続く第 2 章では、アリュートル語の背景的情報と、本論文で扱う所有表現を理解する上で必要な文法構造について概観している。具体的には、音韻の体系が示され、名詞変化と能格構造における格標示、名詞修飾構造などが概説される。これらはいずれも基本的に著者自身の調査と分析に基づくものである。

第 3 章では従属部標示型の 3 つの接尾辞について扱い、これらの形式がほかの名詞を修飾するのに用いられることを示した。チュクチ・カムチャツカ諸語の先行研究では、これらの形式は名詞語幹の譲渡可能性や有生性の程度によって選択されるとされていたが、著者の調査では所有者と所有物の意味的な関係も形式の選択にかかわることが明らかにされた。

第 4 章では、先行研究において「修飾形」とされてきた主要部標示型の接尾辞について扱う。この接尾辞は名詞語幹のほかに代名詞語幹、副詞語幹、数詞語幹および動詞語幹にも付くことがあらたに指摘された。機能の面では、オーストラリア原住民諸語に見られる一部の所有形式に類似していることが示される。

第 5 章では、先行記述で「～と一緒に、～持ちの」をあらわす形式とされてきた接周辞について扱った。この接周辞をとりうる名詞には制限があることを示したうえで、これが所有というよりはむしろ存在をあらわす形式であると結論づけた。

第 6 章では共同形「～と共に」とされる 3 つの形式についてまとめた。アリュートル語の共同形は所有と直接かかわるものではないが、そのマーカーは上述の接周辞と共通する接頭辞を持ち、おそらく歴史的には共通の起源を持つことが示唆される。

第 7 章ではアリュートル語の抱合における興味深い特徴が、所有表現とのかかわりで述べられる。アリュートル語において抱合はきわめて生産的な語形成の手法の一つである。しかし他動詞が行為の受け手を文中にあらわしつつ、行為が及ぶ直接の対象を抱合するときには、抱合される名詞には制限があることが明らかにされる。つまり、所有者と所有物が譲渡不可能の関係にあるとき、具体的には身体部位をあらわすときには、所有者が他動詞の直接目的語としてあらわされ、所有物は動詞に抱合されるという。これはたとえば英語で “I hit him on the head” 式の表現が所有者の身体部位に限られる、という制限にも通じるものであり、類型論的にきわめて重要な現象の指摘である。

最後に第 8 章において全体を総括し、残された問題について触れる。著者自身、本論文で扱った形式や構造について、データや分析が必ずしもまだ十分でないことを認識しており、今後の研究の深化が必要なことを述べている。しかし本論文が問題の一層の解明のための基礎となるものであり、今後の発展がおおいに期待できることは、疑いのないところである。

付録として、第 3 章で扱った接尾辞にかんして、同系のチュクチ語・コリヤーク語の対応形式について、先行文献から集めた語彙リストが示されている。こうした点でも、本研究は独自のデータを中心としながら、関係文献や同系言語にも目配りを怠っていないといえよう。

学位論文審査の要旨

主 査 教 授 津 曲 敏 郎

副 査 助教授 加 藤 博 文

副 査 助教授 佐 藤 知 己

学 位 論 文 題 名

Possessive Expressions in Alutor

(アリュートル語の所有表現)

1) 審査日程

本論文の審査は次のような日程で行われた。

平成 18 年 1 月 13 日 審査委員会発足

平成 18 年 1 月 16 日 第 1 回審査委員会：論文コピー配布、審査日程の調整

平成 18 年 1 月 30 日 第 2 回審査委員会：問題点の整理、口述試験実施

平成 18 年 1 月 30 日 第 3 回審査委員会：試問結果の検討、学位授与の判定

平成 18 年 2 月 6 日 第 4 回審査委員会：報告書原案の作成・検討

平成 18 年 2 月 10 日 審査結果報告書の提出

平成 18 年 2 月 17 日 研究科教授会において審査報告

平成 18 年 3 月 6 日 研究科教授会において審査、学位授与承認

2) 審査経過概要

第 2 回審査委員会において、論文提出者から論文内容の概要について説明を受けた後、各審査委員から質疑がなされた。これにより、本論文の主張点がいつそう明確になり、全体として構成・内容とも高い水準にあることが確認された。引き続き行われた第 3 回審査委員会において、学位を授与することが妥当であるとの判定を行った。ただし若干の軽微な不備が指摘され、その部分については訂正を求めることとした。これを受けて、主査を中心として審査報告書原案の作成に取りかかり、第 4 回委員会において、報告書内容の検討と確認を行った。

3) 本論文の研究成果

本論文の成果および評価できる点は次のようにまとめられる。

1. アリュートル語において、従来、記述と分析が不十分であった所有表現の問題をとりあげ、その全体像を明示的な手法で網羅的に示した点。

2. アリュートル語のみならず、同系のチュクチ語・コリヤーク語にも目を配り、チュクチ・カムチャツカ語族の比較研究にも寄与しうるデータを提示した点。
3. 所有表現を、譲渡可能性や有生性などの視点から検証するにとどまらず、能格構造や抱合といった文法現象の中に位置付け、言語類型論に寄与しうるデータと分析方法を示した点。
4. 危機言語であるアリュートル語を現地調査によりデータ収集・分析し、記述を精密化した点。

4) 学位授与に関する委員会の所見

本論文の著者は、地理的条件や媒介言語の問題などからアクセスの容易ではない少数民族言語に早くからとりくみ、すでにアリュートル語の専門家として稀有な地位を内外から認められている。しかもその稀少性に甘んじることなく、本論文においても高い分析能力と広い類型論的知見を遺憾なく発揮している。あえて英語で執筆したのも、成果を国際的に問い、類型論的データとして提示したいという、著者の学問的意欲のあらわれであり、この姿勢は高く評価できる。

審査の過程において、英語文章表現に関していくつかの改善すべき点が見出されるとともに、所有表現にかかわる類型論的サーベイのものの足りなさも指摘された。しかし細かな誤りは十分修正可能な範囲であり、後者の問題にしても、困難なフィールドで独自のデータを収集し具体的な言語事実を提示することに主眼が置かれたことを考慮すると、むしろ今後の研究の展開がおおいに期待できる部分であると認識される。

全体として本論文は、独自のデータと手堅い分析手法で貫かれており、理論と記述の両面できわめて高い水準にあると判断される。こうした点で、審査委員会は、本論文が博士（文学）を授与するに十分値する学問的価値を有するものと、全員一致して認めるに至った。